
青春

マコト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青春

【Nコード】

N1951B

【作者名】

マト

【あらすじ】

10代のヤンチャ小僧達のお話です

俺は竜崎真

東中二年

勇介、ヒロキの三人で東中三人衆と呼ばれてる勇介『マコ聞いたかよ』

俺『何を？』

勇介『二組の加治木がチーム入ったみたいよ』

俺『ふ〜ん』

勇介『ふ〜んじゃねえよ！』

俺『別にいいじゃんよ何を焦ってんのよ。勇介ちゃん』

勇介『焦ってねえけどさあ』

俺『じゃ帰るべ』次の日

教室に居たら

加治木が来た

加治木『ようマコ！俺なあチームに入ったよ俺』だから？』

加治木『あつ（怒）テメエその態度なによ？』

俺『興味ねえんだよ』

加治木『コラ、テメエの態度生意気なんだよ』

その時クラスのドアが開いた

ヒロキ『ゴラア加治木テメエ人のクラス来てなに調子くれてんだよ』

加治木『アツ（怒）ヒロキうるせえよ』

ヒロキ『アツ（怒）』

そこに勇介が来た

勇介『加治木ちゃん一人で何頑張ってるのよ』

加治木『…勇介』

勇介『うちの二人に用事があるなら窓口は俺なんだけど』

加治木『テメエ等俺にそんな態度とるて事はうちのチームにケンカ売ると一緒だぞ』

俺『意味わかんねえなんでチーム持ち込んでのよ』

ヒロキ『まあ上等は上等だけだな』

勇介『やってやんよだ（笑）』

その日の夜

勇介の部屋

勇介『なあ加治が入ってる族…てさヒロキ』ああ…確かうちの二個上が旗揚げしたんだよ名前が黒龍會』

勇介『ヤバイチームで聞いたけど…

ヒロキ『ヤバイのもそうだけど…會長があのお西君だからな…』俺『西が動く事はないな…』

ヒロキ『ああ…ただな』

勇介『なによ意味ありじゃん』ヒロキ『加治の従兄弟も黒龍會のメンバーらしいのよ…』

勇介『そうなんかよ確か加治木の従兄弟で…メチャクチャ危ないて有名な奴だよな』ヒロキ『ああ…あのレッドスターを潰したからな』

勇介『レッドスターの頭で未だに意識不明なんだべ』

ヒロキ『ああ…その時点でレッドスターは加治木の従兄弟の下に付いた…』

勇介『マジ…か』ヒロキ『ああそれだけじゃない…今黒龍會で二つあるんだわ…うちの地元の黒龍會が総本部、隣の町にあるのが支部で感じかなその支部長が加治の従兄弟！』勇介『マジかよ…』

俺『てことは確実にかけられるて事か…』

勇介『マジかよ…』

俺『てことは確実に的にかけるて事か…』

ヒロキ『ああ…しかも西君直々出向いてスカウトしたからな』その頃

加治木『なあ正志ちゃん話があんのよ』

正志『話？』

加治木『実はうちにケンカ売る奴らが居て…』正志『へえ〜で何処よ？』

加治木『うちの中学の奴らなんだ…東中三人衆と呼ばれてる奴ら』

正志『東中三人衆…聞いた事あるな…』

加治木『西君に言うのも馬鹿らしいし…』正志『西ちゃんに言うほどじゃねえな松木〜』

松木『はい』正志『お前加治木と明日何人が連れて東中行って暴れてこいや』

松木『…ハイでも一応西さんに話通した方が…』正志『あつ（怒）この件は本部に言う必要ねえうちらで動くいいな』松木『…すんませんわかりました』

翌日学校の屋上

勇介『はあ〜眠いな』

そこに扉が開いた

勇介『ん？』勇介『タケじゃんかあ』

タケ『久しぶり♪二人は？』

勇介『サボり♪』

タケ『んだよ久しぶりに来たのによ』勇介『てか西高の女は？』

タケ『ああ別れた』

勇介『早いなあもう飽きたのかよ』

タケ『うるせえ（汗）』その時勢い良く扉が開いた

勇介、タケ『んっ？なんだ』

『ハアハアやべえよ』

勇介『浩志どうしたんよ』浩志『ハアハア…殴り込みだ』

勇介、タケ『アッア（怒）何処よ南か』

浩志『ちげえ加治木が変な連中ひきつれてきた』勇介『変な連中？』

浩志『もう浩二とヤスがやられた…』

勇介『加治木のクソボケがあ（怒）』

浩志『マコ達は？』タケ『きてねえよ』

勇介『行くぞタケ』

タケ『おう』

勇介『浩志あの二人に連絡しろ』

浩志『わかった』勇介『アイツ等が来るまで持てばいいけど』

その頃校内加治木『オラマコ出てこいや』叫びながら次々と窓ガラスを割って行く

勇介『加治木テメエ何調子くれてんだあ』

加治木『ヒヤホー勇介ちゃん』勇介の前に金属バットを向けるタケがある人物に気づく

タケ『勇介…加治木の後ろの奴元レッドスターのNO2の松木だ』

勇介『マジか』

タケ『ああ間違いない』

加治木『二人居ねえじゃねか』

勇介『俺が相手してやんよ』加治木『ヒヤヒヤカッコイイね勇介ちゃん』

勇介『死ねや…』勇介が動いた瞬間後ろから強烈な痛みが走る勇介『えっ…浩志？』加治木『ヒヤヒヤ浩志ご苦労』

タケ『テメエ浩志裏切りだなあコラあ』

素早い動きで松木が動く』アッと言う間にタケの顔面に右フックが

決まる

タケ『ガハ…』

崩れるように床に倒れる加治木『ヒヤヒヤおうこの勘違い馬鹿二人
動けねえくれボコボコにしたれや』その頃

俺『ちきしょく負けたヒロキ金貸して』

ヒロキ『あつ俺もねえよ』

そこに居た他校の奴らが話してるのが聞こえた『おう聞いたか東中
殴り込みされたてよ』

『マジかよ』『ああ…加治木てのが黒龍の特攻ひきつれて殴りこん
だらしいわ…』『黒龍の特攻で元レッドスターの連中だろ』

俺『おい兄ちゃん今の話本当か？』

『誰だあ teme』

俺『東中の真だよ』

『東中三人衆の一人真さんすか（汗）』『今マズイすよ…お巡りが
沢山きてますから』

ヒロキ『行くべ』学校…

シンジ『マコ…ヒロキちゃん』

俺『シンジ…勇介は？みんなは？』シンジ『みんな…ボコボコにされて…ヒロキ…ウソだべ』

シンジ『俺が来た時は…もう勇介ちゃんとか救急車に運ばれた』

ヒロキ『加治木の野郎…』

加治木『ヒヤヒヤこれで三人衆終わりだ』

正志『このまま終わりだと思わないなあ』

加治木『な』に言ってるのよ正志ちゃん』病院

俺『勇介…』

そこには包帯だらけの勇介とタケの姿があつた…その夜

俺『シンジ場所わかったか』

シンジ『ああマジで行くのかよ』俺『ああ…ヒロキに言っなよ』

シンジ『…死ぬぞ…』ヒロキ『マジかよ…』俺『ヒロキ…』

ヒロキ『テメエ一人で行くなんてカッコつけすぎ(笑)』俺『足手まといになんなよ』

ヒロキ『誰に言ってるんだ』

俺『…行くぞ』

ヒロキ『おう』 廃墟

加治木『ヒヤヒヤ明日から俺が東中のNo.1だあ』

正志『そしたら東中もうちの下につくんだな』

加治木『当然でしょ（笑）』 月夜の光に写った二つの影…

『アニキ…頭の容体は？』

『ああ…意識は取り戻せたがまだ動けるまで時間がかかる』 『クソタレがあ頭が完全復活すればあんなクソタレなんかにコキ使われずに済むのに』

『馬鹿！声がデかいぞ』

『すみません（汗）』 『それで…準備の方はどうだ？』

『大丈夫です前同盟組んで奴らも手を貸してくれるそうです』 『そうか…』 タバコに火をつけて浮かんだ顔は…

『松木のアニキ自分はここで失礼します』

松木『おう悪かったな浩志』

浩志『失礼します』一人になった松木

『カシラ…必ずカタキはとります』廃墟の前

ヒロキ『さうてどうする？正面から行くか？裏から行くか…』

俺『面倒くさいから正面突破だな』ヒロキ『ok』

俺『久しぶりのデかいケンカだ…気合い入れてけよ』

ヒロキ『言われなくてもわかってんよ！一人か二人殺すつもりだわ』

俺『行くぞ』

ヒロキ『おおっ』その頃

廃工場『西のカシラやはり…正志達が東中に殴り込みしたそうです』

西『…勝手に動きやがって！おい龍一呼んでこい！』

『ハイ』龍一『んだよ！今から女と会うんだよ』

西『そんなのは後回しにしろ』

龍一『あつ？』西『…仕事だ』

龍一『ほう〜で何処のどいつやればいいんだよ』西『正志と加治木だ』

龍一『正志と加治木？』

西『ああそうだ』龍一『意味わかんねえアイツ等やるなんて』

西『アイツ等は少し遊びすぎた』

龍一『な〜るほど』西『頼んだぞ』

龍一『…了解』

部屋を出る龍一がもう一回西を見る『龍一『なあ…』』

西『なんだ？』龍一『昔のあんたなら下の人間なんか使わずにデメエで行ったよな』

西『……』

龍一『まあ別にいいけどなあ』

廃墟

『ガハ』

俺『オラア次』

（チキシヨウ握力がなくなってきた）ヒロキ『殺されなくなかったらテメエ等の頭の所まで連れてけやあ』『クソタレあの二人バケモンかハアハア60人居たうちの奴らを…』

俺『ハアハア後何人？』ヒロキ『ハアハア後は女だけじゃね』

俺『行くぞ』

龍一『ハアハアわかってんよ』廃墟の奥の部屋

加治木『やべえよマジで』

正志『黙ってる逆にワクワクするぜ』女達はすぐに廃墟を後にした

俺『オラア加治木い出てこいやあ』ヒロキ『兵隊が居なくなつて寂しくなつたかあ加治木ちゃん』正志『ガキが調子こきすぎだ馬鹿が』俺『ようやく大将のお出ましか』

正志『遊び過ぎたな…』俺『ヒロキ…お前は加治木宜しくね』

ヒロキ『了解』加治木『ヒヤヒヤヒロキちゃん今夜が命日にしてやるよ』右手には金属バットを持つ加治木

ヒロキ『加治木…テメエは越えちゃ行けない一線を越えた…容赦はしねえぞ』加治木『コゝロゝス』金属バットをブンブン振り回す加治木

ヒロキ『クソタレあの金属バットどうにかしねえと』加治木『ヒヤヒヤ逃げるしかできねえのかよヒロキちゃん』

ヒロキ『…何かないか何か…』ガキーン
金属と金属の音が廃墟の中にこだまする

加治木『ハニヤ?』落ちてた鉄パイプを拾つたヒロキ

ヒロキ『これで平等だな加治木』

加治木『…上等』ヒロキ『オラア』

鉄パイプを真上に投げるヒロキ

加治木『あゝん?』

それを見上げる加治木その瞬間一気に加治木懐に入るヒロキ

加治木『ハッヤツベ』

ヒロキ『バイバイ加治木ちゃん』

ヒロキの渾身のアッパーが加治木のアゴを打ち抜いた正志『さうて向こうも終わった事だしこっちはじめるかあ』

俺『…テメエだけはゆるせねえ』正志『フンガキのくせに生意気なんだよ三人衆とか言われてよ』

俺『だから…勇介達をやったんかよテメエ』正志『…まあな』

俺『一回死んでこいバカタレがあ』

俺『オラア』右ストレート放つ

正志『おっ』正志が交わす

交した瞬間に正志のヒザケリが真の腹に入る俺『うっ』まへのめりになる真

その真の頭抱え顔面にヒザケリ2連発入れる

正志『オラアオラア』

俺『ぐああ』

膝から崩れる真俺『ハアハアクソタレハアハア』

正志『オラア立てやあこれで終いか』俺『終いじゃねえ…ハアハア』

フラフラと立ち上げる真

容赦なく正志の左ストレートが真の顔面を捕らえる正志『ん？』捕えたと思つた正志の左ストレートは空振りし逆に真の右フックが正志の顔面を捕らえる正志『ぐう』

俺『うお』さらに左フックが正志の顔面を捕らえる正志『ガハ』

俺『オラアもう一発』正志の腹に真の中段蹴りが入る

正志『ガッ』真の蹴りもらい吹っ飛ぶ正志

正志『ハアハア』

俺『ハアハアオラア立てまだ勇介達の分が残つてんだよ』

するとそこにある男が現れる『いやあ前より強くなつたんじゃないの』

俺『んっ？』

ライターの火で顔が映る

俺『…龍一君』龍一『は〜いここまでよん』

俺『はあ〜こっちは仲間やられてんだよ』

龍一『こっちは支部丸ごとやられたんだよ支部潰されたら本隊が動

くぞ
』

俺『…』龍一『後はうちに任せろよん真ちゃん』

俺『でもなんで龍一君がここに？』

龍一『ん？この馬鹿殺してこいて言われたから』龍一『ああ、後加
治木な…』

正志『なんで…』

龍一『調子乗りすぎたんだよ正志』正志『俺は黒龍を大きくしよう
と…』

龍一『…余計なお世話だそれに中坊にやられた奴らがこの先黒龍會
の一員で生きて行けると思つか』鋭い目で正志を睨む正志『頼む…
勘弁してくれ』

龍一『…』

『龍一さん加治木の方は始末しました』

龍一『おうご苦労』

正志『テッテメエ松木い裏切りやがったなあ』

松木『裏切り？最初から仲間になったつもりはねえ』

龍一『松木…真を送ってやれ』

松木『ハイ』俺『…龍一君コイツ殺すのかよ』

龍一『…』

俺『龍一君シカトかましてんじゃねえよ』

龍一『…松木い早く真を連れて行け』俺『マジかよ…』

龍一『黒龍の掟だ』

俺『…掟』

龍一『黒龍の一員なら皆その覚悟持つて看板背負ってるんだよ』俺『…』

龍一『そこまで結束を強くしないと黒龍はまともに動きはしない…』

龍一『…だからもう行け』

俺『…失礼します』翌日

病院

勇介『いやぁ死ぬかと思ったわ（笑）』

ヒロキ『たくよケン力弱いだから無理すんなよ』

タケ『おいヒロキ、マコは？』ヒロキ『…西君に呼ばれたよ』

タケ、勇介『ウソ』

ヒロキ『マジ今回…支部潰したからな…』

廃工場西『ようそんな警戒するなや』

俺『ハイ』

西『今回は悪かったなうちの奴らが勝手に暴走したもんだからよ』
俺『いえ』

西『取りあえず手打ちて事でどうよ？』

俺『…手打ち？』

西『おううちも中坊に支部潰されたなあてみっともないからな』俺
『…』

西『納得いつてない顔だな』

俺『普通だったら黒龍の會長から手打ちにしてくれと言われたらハ
イて言います…けど』西『けど？』

俺『今回血が流れすぎた…俺等のせいで関係ない人間まで』西『…
何が言いたい』

俺『…別に』

西『じゃ手打ちな』

俺『ハイ』西『こりんざい黒龍は東中には一切手を出さない』

俺『わかりました』

西『後なあ…おい』松木『失礼します』

西『コイツ知ってるよな』

俺『元レッドスターNo2の松木さん…』

西『そうだ』西『元レッドスターじゃねえけどな』

俺『？』

『復活したのよん』

俺『龍一君…』

龍一『元は俺が立ち上げたチームだったのよ…』

俺『えっ…』

龍一『まあすぐに代わりしたけどな』

松木『代わりした途端正志達に潰されてしまい…』

龍一『2代目も意識取り戻してまた復帰するのかと思ったら引退しますと言われてな』龍一『考えた結果三代目レッドスターの頭を松

木にしたのよ！』

俺『なるほど』

松木『そちらにうちの浩志が居ますこれからも宜しくお願いします』

くしじゃ解散』

俺『わかりました』西『よ』

俺『今日も一日頑張るか』

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1951b/>

青春

2010年12月31日14時04分発行